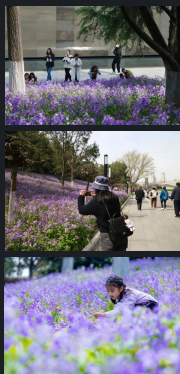




ヘッドラインニュース

和平之花紫金草が館内で満開



南京大虐殺生存者陳桂香さん死去

南京大虐殺生存者陳桂香さんが3月5日にお亡くなりになり、享年99歳。



△2011年、陳桂香さんが日本証言集会に参加

彼女たちの力

3月8日国際婦人デーに、1937年南京で難民たちを救助していた勇敢な女性に敬意を捧げ。

ミニ・ウォートリン

ウォートリンさんは1886年にアメリカイリノイ州に生まれ、1912年イリノイ大学教育専門を卒業後中国に渡った。1919年に金陵女子大学教育部主任に就任、南京大虐殺の際、彼女は国際赤十字会南京委員会委員および金陵女子大学難民収容所所長として、万人以上の女性と子供を守った。



△ウォートリンさんと同僚たちの集合写真（前列左から四人目）

マリー・ツィネム

中国籍に加入した金陵大学の外国人教員。1937年12月、マリーさんは国際赤十字会南京分会の委員を勤め、難民収容所で勇敢に中国女性を犯したい日本兵を追い払った。



△ウォートリンさん（左）、ツィネムさん（右）と赤十字会のお粥工場のスタッフたち



イヴァ・ハインズ

ハインズさんは1872年に生まれ、1912年中国に渡り、1924年から鼓樓病院で看護師を勤め始めた。南京大虐殺の際、彼女は鼓樓病院に唯一の外国人看護師だった。



△ハインズさんは両親が殺された戦争孤児にミルクを飲ませる



イベント

5月27日午後、アメリカ人チャールズ・ヘンリー・リッグス氏 (Charles Henry Riggs) の子孫らが南京を訪れ、リッグス氏が生前に中国政府から授与された「采玉勳章」を含む貴重な歴史資料8点(セット)を記念館に寄贈した。「采玉勳章」は87年前、リッグス氏が日本軍の暴行を阻止し、中国人難民の保護に貢献したことを物語る。「采玉勳章」の寄贈は当館にとって初めてのことである。



当館館長呉峰 (右) からリッグス氏の孫スティーブン・ハンキンソン (Steven Hankin) に寄贈証書を贈呈



リッグス氏の孫スティーブン・ハンキンソン (左) とダービット・ハンキンソン (右)

5月18日の国際博物館の日に、記念館で「平和のために—フランスマン画家クリスチャン・ボアロ氏 (Christian point) 追憶展」が開催された。展示は「南京の虐殺の記憶」「ボアロの目に映った南京」「中国と外国の架け橋」の三部会、合計14枚の油絵を展示し、専ら、両国人民が歴史を忘れず、平和を大切にし、未来を切り開くことを表明している。今年3月18日、展示の準備中に、ボアロ氏は急病で倒れ、63歳の生涯を終じた。当館は彼の最後の願いを完成させた。



展示のPR看板



ボアロ氏の娘さんが画展に参加

第29回世界図書デーには、記念館のロードショーホールで「記憶の扉—インタラクティブ」活動が行われた。南京大虐殺の歴史記憶の継承者、当館の歴史教育担当、紫金草ボランティアなど人の代表が「ラベの日記 (青少年版)」の一部を朗読で読み上げ、感想を話し合った。



「ラベの日記」を読み上げる五人の代表

生存者の情報

南京大虐殺生存者の劉素珍さんは、4月21日に93歳でこの世を去った。劉さんは1931年11月に生まれ、3歳の時に父をなくし、祖父母と一緒に南京市珠江路吉光堂同仁街に住んでいた。1937年に南京大虐殺が起こった時、劉さんはまだ6歳で、日本軍に銃弾で右腕をやけどさせられた。



劉素珍さん (右) の生前の写真

今から86年前の1938年4月30日、米国オハイオ州シンシナティで出版された「クラスメート」は、「フォートリン日記」を詳しく紹介した。南京大虐殺の間、アメリカ人のミネーヴォートリン氏と中国人の程漢男氏は、金陵女子文理学院を守るために南京に滞在していた。どんなに忙しい時期も、お二人は日記を書き続け、日本軍が行った残虐行為の詳細を同時に記録した。



「クラスメート」で紹介したヴォートリン氏の話



歴史記憶の継承

アメリカのサンパウロ市立南陸看護学校を卒業したミゲル・ハインズ氏は、1912年に中国に入り、1924年に結核病院で看護婦として働き始めた。南京大虐殺の間、ハインズ氏は病院で新生児の世話をした。未婚の彼女は母親ではなかったが、多くの子供たちの「母」になった。看護婦の日と母の日に、AIを使ってハインズのモノクロ写真に色を塗り、この素晴らしい女性を偲んだ。



AIで再現した赤ちゃんの世話をしているハインズさんのカラー写真

訪問者の声

メーデーの連休中、記念館を訪れた日本人の「曹田」さんから、「日本では虐殺のことがこれまで詳しく知られていませんが、今日ここに来られて知ることでできてよかったです。日本人として、こういうことがあったことを忘れてはいけません」とのメッセージを書き残した。



現在中国の南京大学で留学中のスペイン人見学者アドリアンさん (中国名:王明知) は、「南京大虐殺の歴史を学ぶためにここに来た。第二次世界大戦の歴史をもっと知りたい。私は南京がとても好きだし、記念館はとても意味のある場所です。平和の大切さを教えてくれる。平和はどの国にとっても大切なことだと思います」と語った。





イベント

中国の伝統的な端午の節を迎え、多くの見学者が歴史を学ぶために記念館を訪れた。このため、記念館は開館時間を延長し、「記憶の声」朗読活動を企画し、特別グループ専用の優先窓口を開設し、問い合わせ電話に迅速に対応してきた。連休の3日間、見学者は『ラーベ日記』を朗読し、歴史を振り返り、犠牲者を偲んだ。中国福建省から来た11歳の官景恒さんは「鉄兜をかぶって日記を書いているラーベさんの銅像を見た後、『ラーベの日記』の朗読に参加し、身の危険を顧みず中国難民を助けるために犠牲ってくれたラーベさんに感謝する。これから歴史を心に刻み、しっかり勉強する」と語った。



2023年12月13日夜、南京紫金草芸術団の児童合唱団60人余りが、オリジナル曲「隅に向かって伸びる紫金草」を歌った。この歌は果てしない悲しみを伝えると同時に、心強さと未来への期待をも聞く側に伝えたい。今年、南京紫金草芸術団児童合唱団は新メンバーを募集し、合唱を通して歴史を学び、小さな平和使者を培うことを目指している。



生存者の情報

南京大虐殺の生存者である高如琴さんが5月23日、90歳で亡くなった。高さんは1934年1月生まれ、当時、家族とともに城内で避難する途中、侵入してきた日本軍に小銃で撃たれ、高さんの手を繋いでいる祖母は胸に撃たれて、高さんのそばで即死し、母親の足が撃たれて負傷した。その後、生き残った家族と一緒に難民キャンプに入って避難した。



歴史記憶を受け継ぐ

カナダ時間の6月8日、トロント市内にあるアジア太平洋平和博物館 (WongAvery ASIA PACIFIC PEACE MUSEUM) が正式にオープンした。同博物館では、アジア地域における第二次世界大戦の歴史を展示している。展示は「戦前」「日本の軍国主義と侵略」「大虐殺」「日本軍の性奴隷制度」「細菌戦と人体実験」「捕虜虐待および強制連行」「アジアの第二次世界大戦とカナダ」「日本の敗北」「戦後の正義」「記憶と反省の間」の10個のセクションで構成されている。第3セクションでは南京大虐殺に焦点を当てている。中国系カナダ人の王裕佳氏、劉美玲氏たちの20年来的努力によって、この博物館の設立を実現した。



見学者の声

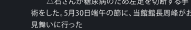
6月21日の午後、南京出身の黄安慧さんとカリフォルニア大学バークレー校の哲学博士課程に在籍するミラン・モッセさんが一緒に記念館を訪れた。ミランさんは、南京大虐殺史実展を見学しながら、思わず涙を拭いていた。彼は「日本軍に刺され、流産した生存者の李秀英さんを見た時、言葉で表現できないほどの悲しい気持ちになった」と話した。ミランさんはまた、南京大虐殺の歴史はアメリカの歴史授業では学んだことなく、帰国したら記念館で見た史実を友人や家族に伝えたいと語った。今回、黄さんの案内で南京を散策したミランさんは「南京はとても美しく、とてもフレンドリーな街だ」と絶賛した。

7月7日午前、当館は抗日戦争勃発87周年記念行事を開催した。南京大虐殺生存者の遺族代表、小学生代表、見学者代表、記念館館員代表ら87人が参列した。87年前のこの日、日本軍侵略者は世界に衝撃を与えた盧溝橋事件を引き起こし、それによって中国人民の全民族抗日戦争の序幕が開かれた。

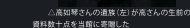
この夏、記念館が見学のピークを過ぎた。開館時間延長（8:30—18:00）や防暑対策の導入、ボランティア活動などを通じて見学者に快適な体験を提供した。



南京大虐殺幸存者石秀英さんが7月12日早朝、98歳で逝去した。1937年、石秀英さんの父と兄は日本軍に連行されたあとに殺害された。母親が臨時雇いの仕事に強いられ、苦勞して幼い子供を養った。2015年12月9日から14日までの間、石秀英さんは日本の熊本、長崎、福岡を訪れ、南京大虐殺幸存者証言集会に参加した。



7月18日午前、今年に亡くなった程福宝、陳桂香、劉素珍、高如琴、石秀英、計五人の生存者の冥福を祈るために、当館で清灯式を行った。

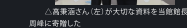


南京大虐殺の幸存者周志林さんが7月20日、99歳で亡くなった。周さんは1925年12月23日に生まれ、1937年、彼の家族は南京市江寧区麒麟鎮洛家辺に住んでいた。侵略してきた日本軍は彼の祖父を刺し殺した際、彼は祖父から十数メートル離れた地面に横たわって、死んだふりをして死を免れた。



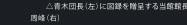
今年で90歳近くになる台湾の弁護士高素翰さんは、1935年に中国山東省の萊陽で生まれ、1948年に13歳で家族と共に南京に上り、その後台湾に渡った。大陸との往来が再開後、高さんは百名以上の台湾で亡くなった老兵の遺体の故郷へ送り込んだ。2012年度「中国を感動した十人」に選ばれた。7月6日、高さんは記念祭が営まれ、「日本侵襲由深蒙剋」（劉庭編）、「戦犯谷寿夫判決書正本」らの六冊の貴重な本や新聞紙、直筆の手紙などを記念館に寄贈した。

記念館を後にした彼は、思わず涙を流しながら、「台湾に帰ったら、台湾の若者に南京大虐殺の歴史を知ってもらうために、学校に行き話をしたい」と語った。



7月14日午前、日本「平和の旅訪中団」が当館を訪れた。その訪問は今回で29回目となった。

園長青木雄次さんは、現在の日本の軍備増強や歴史を否定する流れに懸念を示した上、今回の訪問も、議員たちと一緒に、日本国家主義が日本国に対する侵略および南京大虐殺の歴史を改めて認識でき、被害者に申し訳ない気持ちを持てることを願った。「歴史の真実を学び、学習を通じて悲劇が繰り返されるのを食い止めることは、私たちにとって重要な使命だ。歴史を学ぶことは日本友好のためであり、歴史を忘れないことはこれからの平和のためだと感じた」





イベント

八月十五日「日本の無条件降伏79周年」記念活動

8月15日前、日本の無条件降伏79周年を記念するイベントが当館で行った。南京大虐殺生存者の子孫代表、南京の青年代表、大学生ボランティア代表、雲南省山間部の青年代表など50人が参加した。参加者全員が映画『降伏へのカウントダウン』を見た後、抗日戦争元兵士たちの手形の壁のところで、勝利を表す巨大な「V」の形をしたパネルに手形を押した。

南京大虐殺の生存者・夏淑琴の曾孫である李玉翰さんは「歴史の悲惨な記憶を忘れてはならない。生存者の子孫として、南京大虐殺の歴史の記憶を継承し、戦争に反対し、平和を大切にする役割を果たしたい」と語った。



第二回若手研究者南京大虐殺史シンポジウムが開催

8月9日、南京で「新しい史料と新ビジョン——第二回若手研究者南京大虐殺史シンポジウム」が開催された。国内外20の大学から30名近くの若手研究者が参加し、南京大虐殺、日本の中国侵略戦争、国家追悼式、戦後の調査と裁判、傀儡政府研究などをテーマに学術討論を交わした。



心のケア

医療関係者と共に生存者を訪問

8月17日、記念館は南京侵華日軍被害者援助協会、江蘇省人民病院のスタッフと共に生存者の蒯桂蘭さん、馬庭宝さん、王義隆さんの自宅を訪問した。医者が生存者の血圧、血糖値を測定し、最近の健康状態を問診した。

2018年から、この医療サービスを定期的に生存者に提供し始めた。また、生存者の健康を守るために、病院で治療を受ける際に優先窓口などの利用もできるようになっている。



受け継ぐ

アイリス・チャン氏を記念するビデオ作品『あの夏に戻る』を公開

1995年夏、中国系アメリカ人作家のアイリス・チャン氏は、南京大虐殺の歴史の真実を明らかにするために南京を訪れ、南京でビデオカメラを回して貴重な映像を撮り残した。氏は南京大虐殺の史料を丹念に探し、多くの生存者にインタビューを行い、帰国後に膨大な取材メモと録音を整理し、『ザ・レイプ・オブ・南京』を執筆した。同書は南京大虐殺60周年にあたる1997年に出版され、第二次世界大戦中に日本軍が南京で行った残虐行為を暴き出し、欧米諸国では強い反響を呼んだ。

今年はアイリス・チャン氏の20年祭、記念館は『あの夏に戻る』と題したビデオ作品を作って公開することになった。

